絵入
二

吉野山独案内巻二目録

吉野山独案内巻二

○金の鳥居わたり三丈五尺はしらの大さ丈五尺廻る鳥居の額と名筆くれ發心門とかきたる破損あけるによりていおろして蔵王堂のうら手ありすこし西に蔵王坂あり静といふの旅宿ありけるとかしれなき

千載集　　権中納言経房

みよしのを神の擁護にまかせて四代と三門へ入

藤原敦家公歌して海ひし時

かねの鳥居のはしらにかきつけ給ふ

日
長くさめんと曉を待程のやこゑを聞て住清乃樋
色なれよ白きひかしに御舟山あかきを雨りめさの
山あるをまとうしひさりに桜か山嶽あり

柿本人丸

新勅撰
みよしのゝ御舟の山に立雲の常にあらんと我思はなくに

正三位重氏

新後撰
瀧のうへに花をさそふは嵐吹みふねの山の桜なりけり

大相國家康公

咲花の紅葉を思ふみよしのゝ山あらしにさそふ山風

発心門

茶 紙 涼 道花
花籠 瓶鮨 柴 糸瓜 樒 菜
木枕 山まゆ 松葉 推葉

けつこう

短冊や花よしのゝうけ給り
みよしのや花をおもひとうけ給り

摂州今井安田氏　道順
浅羽山田中野氏　成伯

琥珀と見る明の月とみるときはたれか里にぞ
同今井木原氏　元信

みよしのゝ山のわさ稿小思ひ文て四季をかへらぬ
同今井大内氏　宗勝

初折

同

芳野山やそれゆへゆかし葛の色こゝに服屋あふたえぬ人や涼ん

和州今井木角氏　宗勝

初折

同

夕暮は月は紙鞠やみるめ葛衣まそれわらしといふ

同州今西氏　毎雄

澗菜や流れもうしひかりは葛

京　重頼

吉野葛や宮ともかへと云ふ色

京深草氏　如雲

大和守らぬは根やまつられぬ葛

天満　西花

花より風やよしのゝ葛ならねど

和州間宮氏　是望

栢

初折

ちつや香はぬき海さひらせさ道と今にあはぬかや

同今井今西氏　宗獨

同

あちこちにふとよみかや紙太森よそおひしけふもくれなゐ

河州柏原三田氏　淨次

よしのやこゝにちれる花の名ちる　　堺池鴻氏　盛之

ひさご売とよしのゝみよし野や　　大坂住　玖也

よしの柄をゆるかや山もちりかゝり　　京　昌意

みよしのゝ桜のくれぬともよしの花　　堺南山田住　念吻

芸ちとしるかほやよしのゝ紙　　同山田古跡　伊人

青葉の比はよしのにて
ちりても花のゆかりのうすさくら　　堺之住　利房

花さくは桜とそれよしのゝ
うらし　　同住　方由

よしの山よしや紅葉もちるか　　山崎　宗鑑

花の風やよしのゝ花の雲の道　　京　貞室

うつしおきて見る花やちるよしのゝ山　　京　立圃

よしのゝやあらしもまてこしも花に道　　堺住　宗賢母

花ちらしゆるやよしぬく縁鬼か冤　　江戸住　重成

菜

春寒あたゝかなせんし菜をよりなたもて　　堺谷氏　永重

狂哥
みよしのゝ山を霞てたもこさをのとやかにはるへきぬらむ　　和刕今井今西氏　毎雄

よしの山やたもてぬるふり花くもら　　天満　良張

冬よきあたしといよしの一粒　　吉野山峯井氏　義房

つくり花

作り花よそれとみるこひのぬきを志らり　　堺池嶋氏　成之

ゝけを丈八尺運慶湛慶の画　作なりと　京　貞室

さらくさ花道しるべとり山桜　大坂河内氏　本茂

相寄
二まつの風に一流ひとつ唐わらんの文字とこやしら　山城山科清水氏　真察

蒼ともしらく花やあらんの二まつ　同今井森巴氏　顕真

落花やいともしら二まつのちらりまき　同色生住　善行

花軍ともしるや文武二まつ　同俵本住　行好

花なり杉丈ちるを思ひ二まつ　同高田住　似柳

花とこそ太刀わくや二まつ　同今井家長氏　立本

花いくさ家りかくとめりの二まつ

威徳天神
ごまだう
ろう人のあと

もとハ小丈四尺千手観音右ハ弐丈弐尺弥
勒菩薩の尊像なりしを宝永に又開山役乃
優婆塞ハ三十余歳乃ゐをそりとゞげし
さき白色のふさとひとつの服ハ安置せり識は
窟乱よりおられしより土多のこしくあり抑役乃行
者といふハ和州茅原乃郷に降誕ありて
父ハ高賀茂氏間賀介麿呂といひ母ハ
相形氏渡都岐麿呂といひしとや母夢
中に天より金杵ふるをみる口のうちはいるとおもひ
いつとみて懐胎し男子とうめりしかるか

かるゆゑ余か人ゟことわりをかなへしと經言云

我本立誓願　一切衆生於　我等与無異

如我昔不願　今者已滿足　化一切衆生

皆令入佛道

此文をもちゐてそなはしつゝひのまことをみしり給へ

と彼の小角巳に七歳のときよりわかく

金剛山よりのかつら法起菩薩と現し九歳の

ほどよりも藤皮を結ひ肩にかけ松の葉を食

ひして佛道をもとめ大藏にわたりし猶

別異國のかつら龍宮より龍樹菩薩の

あひ給ひ秘密瑜伽の大灌頂を相承し三
十余歳にして和州葛城山より熊野山に経
て大峯山とふをきけるはじめしのへよりしぬと経
の奥の院たちまちに修行者飯鉢嶽にいでられた
まへに七生のおよりは山峯を険しとて修行し
三生は友乃龍骨あり右のまへりし細と
にさりれまへ獨鈷を持あふ乃これあらはせ
行者これをみしりて御なげきある行帰依
へ毎一夜夢中に告ていはく三生以前乃
くるりあり般若心経を誦しかの細を云道也

とゝし經のひて夏さめぬこそ後奇特(きどく)さ無
みしてをとしへのごとく祈(いの)りつゝあへてまとひう
まそ願をひろひとし此嶺(おけ)におさめさ無すゆ今
験(けん)の靈(げ)所又行者三十八歳の八月十
九日大峯(おほみね)涌出(ゆじゆつ)の嶽にして吉野山熊野の
尊(そん)と祈りけるに大聖釈迦現(しやかげん)じ給ふを行者
見者のたまはく此者は濁悪(ぢよくあく)の衆生なれは
柔和(にうわ)の御形にては済度(さいど)しかたしとかさねて
濁劫(ぢよくかう)にしるへして千手(せんしゆ)観音現(くわんおんげん)じ給ふ御
衆生(すくさ)にはて悪世(あくせ)の化度(けど)はかたしといふ

祈りしかは三度におよひける時に弥勒菩
薩のあらはれ給ふ御すかたいつくしかりけるに
経には降魔の神と現し給ふと説て観
法にも見えたりけり宣化天皇三年戊午に大地
震動し虚空より数万の雲あらはれて青黒
忿怒のかたちあらはれていてましに三鈷を持
し右の手に獨鈷をもちて虚空をとらへ
右の足は大虚をふまへひたりの足をとゝめて
金剛不壊のよそほひの姿を持須弥おしふりひ
即文をとなへて曰

昔在霊鷲山　説妙法花経
今於金峯山　示現蔵王身
釈迦千手弥勒の三尊なれハ小角にあらハれたま
ふし擁護として八大童子諸菩薩ハ南
方よりあらハれてつきしたかひ済度とをけ給ふ附
行者ハ歓喜の涙をなかして出現の尊像を大
峯山上に安置したまふ秘仏の御ありさま也
此へ一刀三礼にて蔵王の像を彫て安禅ト寺なり
すへ諸人ふれて今の世まても女人禁制なり
此へ行基菩薩彫刻とて蔵王の像とて

らせ給ひし年号に安置志給ふ武運長久
又五穀成就の御祈なれハ万人こゝろをかけ
いはゞ一度此山へ参る人ハ皆億劫の
罪も消滅すべきとなん
○本堂のうら右の方に弘法の御作の不動尊
○庭前に吉野桜あり此吉野桜の本中道
野山の曼荼羅と勅額一切経おさめ給ふ
又吉野桜のうらに不動石とて霊石あり右の方
に鎮守天神の社あり又開山上人の
石にてきざみしを本尊とす又大塔の阿弥陀護摩

堂千躰地蔵堂の東の方に維摩遠龍春廟
小金剛力士二階の門石居あり下に恵美
須大黒天寶殿あり

櫻花　　平城天皇

宵在幽巖下　光華照四方
忽逢攀折客　含笑亘三陽
送気時多少　垂陰枝短長
如何此一物　擅美九春場

大相国家康公

長き代ハ子を色の春をとゝめ此花みちさらへ誘われしる

右大臣晴季

桜ちる木の梢のあらしてより猶山もとふりくるかな

三位法印玄旨

みよしのや花の源雪とふる花とたひも昔のおもかけ

中納言親綱

白雲とまかふ梢てらしぬ山風かゝとふりくさ花さそふ哉

中納言秀保

さらくにそてもみ猶見るに花はやとけぬまて

中納言秀俊

みよしのゝ花のさかりとしらぬ人はまさにやまのおもかけそ

中納言秀家

風吹と花はちりけり山桜ひとつのえたをしらねと

右近衛中将利家

下遷宮乃おりに

此花の殿遊そめてさらに御殿　吉野山吉田氏　季知

大塔

大塔や山と立花乃まん椿　和州今井大内氏　宗勝

大塔の花もやいつて九つまん菊　同所住　宗壽

筋違観音

柳の糸乃筋違の観世より　同軽弓場氏　元信

千躰地蔵

咲そ絲ふ花や千躰乃地蔵良　大坂河内氏　本茂

恵美須大黒

一日市二にみて花や笑ふ残姫のえびす大こく　和州世栗氏　正重

月よ花よ年のさいうくえびすかな　和州高取城下矢野氏　無省

楼門

楼門(ろうもん)よりも月出ぬ夕かな　　和州小越知住　東清

花

杉井

国くにありとあそふ児桜(ちござくら)ぬ花の杉やちらぬ山かな　　八宮家生白庵　約几

同

とんぼうも花にはゆるす也表師ならでこの字を蜒ん　　和州今井細井氏　宗利

同

春りやくて猶(ねこ)ひそかにまよひ花のもとぞや覚悟してらん　　同所森田氏　元信

同

よしの山花の清の庭たちても雨さ桜は春風そろて　　同所尾崎氏　元継

同

よしの山桜の枝とめけつ花のけふの日ましあるかな　　大坂　行順